

Nerima Gender Times

2021年6月10日発行 発行人：奥田富美江 nerima.gender@gmail.com

練馬
ジェンダー
タイムズ No.1
座談会

司会…小松あゆみ練馬区議



片野令子

1943年福島県生まれ。元練馬区議(8期)。現在、地域で脱原発、憲法守る運動などで活動中。



とや英津子

1963年練馬区生まれ。2003年から練馬区議、2017年東京都議会議員(日本共産党)。



山岸一生

1981年川崎市生まれ。立憲民主党衆議院東京都第9区総支部長。



高口ようこ

1980年練馬区生まれ。「市民の声ねりま」から区議補欠選挙に立候補し当選、現在2期目。

女性議員に野次が飛ぶ区議会

小松 片野さんが区議になられたのは、1979年。その頃の区議会はどんな様子でしたか。

片野 私は生活クラブの「代理人」として初めて区議会議員になりました。当時56人の定数のうち女性議員は3人だけ。完全な「男社会」で、委員会室にはタバコの煙がもうもうと立ち込め(一同「ええー!」)、議会事務局には議員にお茶を淹れる女性職員がいたんです。私はそれに反発して、「お茶は要りません!」と断っていました。



高度経済成長期で、合成洗剤や車の排ガスなどの環境汚染が大問題になっていました。有吉佐和子の『複合汚染』や、レイチェル・カーソンの『沈黙の春』なども読まれて、女性たちが中心になって消費者運動が大きく広がっていた頃でした。学校給食の調理員さんは洗剤で手が荒れて痛がっていたし、野菜は塩素系消毒液で洗われ、安全性に問題があり、そうしたことを議会で質問すると、男議員たちから「また石鹼か!」と野次が飛ぶ。環境が悪化すると人間にも悪影響があり、男性の生殖にも影響があるといわれているという問題を取り上げたときには、「一人者のくせに!」と野次られました。

とや ひどいですね。私が区議になった頃には、片野さんの頑張りもあって、そこまでひどくなくなりましたが、都議会では、わりと最近でも、塩村あやか都議(現・立憲民主党参議院議員)が妊娠・出産に悩む女性への支援策を求めた時、セクハラ野次がありましたね。

高口 今も練馬・生活者ネットワークの区議さんたちは環境問題や食品の安全のことを熱心にとりあげています。私も若い頃は安いものを買っていましたが、やはり子どもが生まれると、いかに安全なものを手に入れることが大事か、考えざるを得なくなりました。

山岸 環境や食品の安全性の問題が、「おんな・こども」のことと軽んじられる風潮が、政治の世界でも政策の順位をゆがめていると思います。安全保障とか改憲とか、ある意味「マッチョ」な政策テーマだけが重要という政治風土を、われわれ自身が努力して変えていかないといけないです。

片野 練馬には消費者運動の先頭に立っている学者さんたちがいて、議員の学習会をしたり、実際に石神井川や白子川が洗剤の泡で汚れ、魚の棲めない川になっている様子を視察したりして、男議員たちも「これは大問題だ」となっていました。現地を見て学ぶことが大事ですね。

ジェンダーに気づき、学びながら

小松 私たち自身が学んでいく大切さは痛感します。皆さんはいかがですか。

とや 私の母は舅、姑、父に召使い扱いされ、洗濯も母の物だけ別というような典型的な男尊女卑の家庭でした。私も子どもにおかしいなとぼんやりとは思っていましたが、はっきりとこの社会の女性差別を認識したのは、日本軍「慰安婦」問題です。

そして、議員になってから、たくさんの女性たちの相談にのると、共働き夫婦でも子どもができると女性だけ遠くに転勤させられたり、DVにあっても経済的な自立ができないからと夫の元に帰っていく…そんな現実を知って、母の人生と今も続く女性たちの苦しみがつながってきました。明治期からの男尊女卑に加え、戦後



の経済成長の中で男女の役割分業が押しつけられ、男性は猛烈に働き、女性が家庭を守る、そんな社会が意図的に作られた中での、ジェンダーなんですよ。

山岸 私の人生は、日本のいびつなジェンダー構造の中で、受益者の側にいたんだということを感じます。

父は企業戦士で、母は専業主婦、私は中高と男子校で、新聞記者という“超男社会”で、15年間の記者生活で6回も転職をしている。女性だったらどうだろう、と想像します。メリットを享受してきた側の人間の責任として、政治の世界で誰もが活躍できる社会をつくるために頑張りたいと思いました。

高口 私は恵まれた環境で育って、両親は、幼い頃からボーイッシュな私を丸ごと肯定してくれました。「女の子なんだから」とは一度も言われなかった。結婚して子どもが生まれても、夫は授乳以外何でもやる人でした。それでも、母親になって孤独や息苦しさ、生きづらさを感じるようになりました。今の社会もまだまだワンオペ育児が当たり前になっています。子育てしやすい練馬区にしたい、という思いで議員になりました。

私自身夫と死別しましたが、ひとり親家庭、ステップファミリー、同性パートナーなど、家族の形態はさまざまです。誰もが自分らしい人生を生きられる社会にしたいですね。

山岸 皆さんのお話を聞いて思ったのは、男女が役割分担を強制される社会は、女性を生きづらくさせるだけでなく、男性にとってもしんどいものではないでしょうか。企業戦士だった父は、本人は本望だったと思いますが、働きすぎて早くに亡くなりました。私は父に遊んでもらった記憶はほとんどありません。男性も、仕事も家庭も両立させられる環境であったなら父もまた別の人生があったのではないかと、ふと思います。男性自身が、女性を養わなければならぬ、ブラック企業であっても働き続けなければならぬと思い込んで、過労死までする、そんな社会であってはならないと思います。



コロナ禍の女性たち

小松 コロナ禍でとりわけ女性たちに困難が押し寄せているというの、日本のジェンダー問題のあらわれではないでしょうか。

山岸 私も区民の皆様から様々なご相談を受けますが、最近は女性からが8割です。これまでも女性の多くが非正規で賃金が低い中でも、ぎりぎり紙一枚でつながっていたけれど、コロナが女性へ大きなダメージを与えました。とりわけひとり親家庭の困難は、急いで支援を強めなければならぬと実感しています。

とや DVの相談も増えました。練馬区内にも女性たちを保護するシェルターがあり、コロナで必要性が高まっているにもかかわらず、国が民間丸投げなので、運営している人たちは大変です。婦人相談員も多くが非正規で低賃金です。都政の大問題として都議会でも取り上げて、民間シェルターへの支援は拡充させました

が、まだまだです。

共に新しい社会へ

小松 ジェンダー平等社会を、若い人たちと作っていきたいですね。

高口 大切だと思うのは性教育です。日本で性教育というと生殖、避妊、性病予防など非常に狭い概念です。でも、ユネスコの「国際セクシュアリティ教育ガイダンス」では、人間関係、価値観、文化、寛容、人権など多岐にわたっています。ジェンダーも人権の問題として、おとなも若い人たちと一緒に学んでいきたいですね。



とや 性教育は大事ですね。私も自費でフィンランドに行き、教育施設などの視察をしました。本当に一人一人の子どもを大切にしています。日本はやっと35人学級へ足を踏み出したばかりです。それも長く粘りつよい運動の成果でもあります。

山岸 遅々としている部分もありますが、先人たちの頑張りによって、前に進んできたこともあります。私も記者を辞めて政治の世界に飛び込めたのは、仕事を続けている妻のおかげでもあります。ジェンダーの課題は、女性 VS 男性ではなく、歪んだ社会 VS 新しい社会であるように思います。バックラッシュもあり、社会の劣化も進んでいますので、そのスピードに負けないように、新しい社会を作るために、声をあげる女性たちと一緒に頑張りたいです。

とや 共産党の都議団は18人中13人が女性で、団長も幹事長も女性です。環境さえ整えれば、女性が政治の場で活動できる条件はあると思うんですね。

片野さんをご存じだと思いますが、練馬の女性たちの運動って素晴らしいんですよ。東京ウィメンズプラザには、女性運動の資料があるのですが、練馬のものが特別に多いんです。その練馬で、もっと女性が政治に関われるようにしたいし、まずは都議選で投票率をアップさせたいですね。

片野 今年は女性が参政権を得てから75年でしょう。改憲が狙われている中で、やっぱり女性が平和を守るために頑張らなきゃいけない時だと思います。「徴兵は命かけても阻むべし母、祖母、おみな牢に満つとも」(石井百代)という短歌を、いま改めて心に刻みたいですね。

高口 『わたしは無敵の女の子』(海と月社)という写真集があるのですが、4歳から18歳までの女の子たちの、ありのままの自分を大切にしようというメッセージが詰まっています。これ、とってもお薦めなんです。無敵の女の子、無敵の女性たちが声をあげれば社会は変わると思います。もちろん、男性も一緒に！

小松 今日はありがとうございました。女性も男性も共に平和とジェンダー平等社会をめざしていきましょう。



(写真撮影の際のみマスクを外しています)